

「松原移住地」・移住者たちの証言

—ブラジル・南マットグロッソ州松原移住地の記録—



梅田 幸治

高木 傳造

那須 千草

西尾 政枝

林 とみ代

馬所 弘和

廣井 富二郎

柳生 豊彦

中村 四郎

はじめに

中村四郎

日本では日露戦争後不況が続いたこと、またそれまでの移民受け入れ国だったアメリカで排斥の動きが生じたこともあり、他の移住先を探す必要に迫られていた。

そのような状況の中で、サンパウロ州政府と日本の皇国植民会社との間で移民の契約が交わされ、1908年4月に最初の移民船「笠戸丸」が神戸港を出港したのである。以降、第2次世界大戦中は日本とブラジルはお互いに敵国だったため、1940年を最後に移民は中断されたが、戦後はしばらくして再び移民は続けられてきた。

1952年の日米講和条約の締結と共に日本とブラジルの友好も緩和され、移民の件も再開され、以前の状態に回復してきた。当時のブラジル大統領ゼツリオヴァルガス氏に知遇を受けていたマリリア在住の松原安太郎氏、南伯日本移民4000家族の導入権を得たのである。

松原移住地はそのうちの一つの集団移住地であり、松原氏の功績をたたえて命名されたのである。松原移民が戦後移民の第一歩を印し、1953年7月8日サントス港に着いたのを皮切りに三次にわたって行われた。和歌山県、岡山県、広島県、栃木県、現地から数家族を加え、合計60家族を超える家族が松原移住地に入植したのである。

原始林を切り開いての移住は想像を絶するものがあるが、移住者たちは互いに協力しながら、知恵を出し合いながら日常を進めてきた。しかし、土地の高度の違い等から霜害にやられることが多く、松原を離れて近くの街、農地に移り住む家族も少なくなかった。

ドウラードス市やその周囲にもそうした松原移民の方々が多く居住されているが、口を揃えて「戦後移民の原点」として松原移住地を語ることが多い。数年前に二人の方に話を聞いてJICA（現・国際協力機構）の「移住研究」（現在廃刊）に掲載したが、さらに今回は8名の方にアンケート調査により話を聞くことができた。本書はそれをまとめたものである。

まとめるにあたって次の点に留意した。

- ・アンケート調査は**1998年**に実施したもので、文中の年代等についてはこの点を考慮していただきたい。
- ・アンケートの項目については次ページを参照。
- ・できるだけ原文に近い表現・表記を心がけた。（言葉、句読点、ポルトガル語のローマ字表記など）
- ・巻末に地図など資料を載せた。

アンケートの項目

- ① いつブラジルに来ましたか。(文中では省略して「いつ?」としました。)
- ② 初めてサントスの港に着いた時の印象はどうでしたか。(「サントスの印象は?」)
- ③ サントスの港から「松原移住地」にはいるまでどのくらいかかりましたか。また、その時の沿線の様子はどうでしたか。(「松原にはいるまでは?」)
- ④ 「松原移住地」で過ごすようになった時の印象はどうでしたか。(「松原の印象は?」)
- ⑤ 「松原移住地」での主な仕事はなんでしたか。(「松原での仕事は?」)
- ⑥ 畑では何を作っていましたか。(「畑では?」)
- ⑦ 行事や親睦会など何がありましたか。(「行事などは?」)
- ⑧ 「松原移住地」での日本語教育はどのようにして進められましたか。(「日本語教育は?」)
- ⑨ いつ「松原移住地」を離れたのですか。また、その大きな理由は何ですか。(「松原を離れたのはいつ?」)
- ⑩ 日本とブラジルとの関係で何が一番大切だと思いますか。(「日本とブラジルの関係で大切なことは?」)
- ⑪ 「松原移住地」での生活を振り返って印象的だったことがありましたらお書きください。(「松原の生活を振り返って・・・」)

目 次

はじめに・・・・・・・・	1
梅田幸治・・・・・・・・	3
高木傳造・・・・・・・・	5
那須千草・・・・・・・・	8
西尾正枝・・・・・・・・	9
林とみ代・・・・・・・・	12
馬所弘和・・・・・・・・	14
廣井富二郎・・・・・・・・	15
柳生豊彦・・・・・・・・	20
参考資料・・・・・・・・	31
おわりに・・・・・・・・	32

梅田 幸治 (和歌山県田辺市出身)

① いつ?

・1953年7月3日サントス着。私は28歳、妻は23歳でした。私と妻と長女(1歳6か月)と私の妹の4人です。

② サントスの印象は?

・大先輩のご苦勞を偲びながらまいりました。私は第2次世界大戦当時シナ大陸におりました関係か、また満州の政府の特設農場にもおり、ドイツ人等白系ロシア人とも生活しましたので、特別外国へきたという感じはありませんでした。むしろ私の理想である新天地を求めて、其の信念で満足しました。

③ 松原に入るまでは?

・サントス着以降は貨物列車同様の汽車で、時速70km位、各駅では二組に分かれた日本人の皆さんに懐かしい心からの歓迎を受け、お互い涙を流した時もありました。カンボグランデに着いて荷物共々トラックでドウラードス着、夕方でした。町は町造りの初期でした。戦後移民が来るというので先輩たちは自分の家族のようにして迎えてくれました。

④ 松原の印象は?

・受け入れ側の義務の怠慢と申しますか、私と松原さんとの直接の話とでは大きな相違があり、困りましたので自分の土地に落ち着くまでは相当な月日がかかりました。苦勞の後の楽しさというか、借地でなく自分の土地だから将来の計画も立てられるし、何とも言えない喜びが心の底から湧いてきました。

⑤ 松原での仕事は?

・最初は何も解りません。でも私たちは日本等で経験がありましたから助かりました。何も知らない人はお気の毒に思われました。でも助け合って頑張りました。

・カフェ栽培 ・米作り+トウモロコシ+ブラジル人主食の豆 ・養豚

⑥ 畑では?

・松原植民地は、第一に恵まれたのは土地の良いことでした。私は16年居りましたが、一粒として肥料をやったことはありません。それで大助かりでした。ブラジル全土でも屈指のところですよ。

⑦ 行事などは?

・すぐ日本人会を作りました。特に私たち11家族は一つになって組合組織を作り、作物の販売、生活必需品の購入など係を決めてやりました。大変な良い結果となり、皆さん喜びました。

⑧ 日本語教育は?

・最初は土地を出して小さいながらも共同で校舎も建て、入植者の方の嫁さん等(日

本で学習された方) をお願いしてやりました。

⑨ 松原を離れたのは？

⑩ 日本とブラジルの関係で大切なことは？

・入植当時から私は痛感しました。日本は島国、その上何も資源がない、反対にブラジルは総ての資源が豊富にある。軽く考えてもこんな国がどこにあるだろうか。50年前にはブラジルは処女の国だ、その上差別がない。少し遠いと言うのが欠点かもしれません。今になったら距離の問題ではありません。

⑪ 松原の生活を振り返って・・・

・ブラジルは天国であり、マットグロッソは第2の故郷。入植当時は私たちと同じで他の州から来られた北伯の人でしたがとても親切で、若い独り者であったら国際結婚していたかもしれません。でも私たちは戦前教育を受けた人間ですから、信念には迷いはありませんでした。日本人の血は最高とっていました。

松原の生活中で大先輩からの心温まるご指導ご援助は今猶眼頭を去りません。苦勞という苦勞はありませんでしたが、お陰様で初志の目的、夢・理想を貫くことができたと私のご先祖様に感謝し、併せて大先輩に限りない感謝を捧げております。

松原安太郎氏が当時の大統領ゼツリオヴァルガスの非公式ですが、移民導入4000家族の使命をもって日本へ帰られました。一介の松原さんではどうにもならず、私の伯父がその大役をお受けして活動に入った次第でした。私も伯父の依頼を受け、カバン持ちをしました。日本の役所のあちらこちらへご案内をお願いしました。目的の吉田茂首相にはお目にかかれず残念でしたが、代わりに無理強行、緒方竹虎副総理にご面接頂きいろいろとお話申し上げました。私としても副総理から御激励を受けましたこと、終生忘れることのできない思い出です。

高木 傳造 (和歌山県上富田町大字岡 1056 番地出身)

① いつ？

・1953年7月5日、32歳（サントス着）。妻、長女、妹と4人。

② サントスの印象は？

・大陸らしく広々とした、呑気そうな国であるように思いました。

③ 松原に入るまでは？

・連邦植民地の事務所の病院の裏の仮宿舎（ドウラードス市より15km）まで5日かかりました。入植地までの道作り、土地の割り当て抽選（9月30日）、仮の宿舎建て（個人）・・・そして家族が入植したのは12月でした。

7月5日夜サントス港発。ソロカバナ線（ソロソロ走る）でバール市着。ノロエステ線（ノロノロ走る）に乗り換え、カンボグランデ市よりの支線ポントポラン行に乗り、イタウン駅下車。トラック（荷物共）でドウラードス市へ夕方着き、町より15kmの地点の連邦植民地事務所の病院の裏の仮宿舎に夜着きました。ドウラードス市では日本人会のお世話で夕食を戴きました。

ノロエステ線では列車の左右に邦人の方々が見えていました。後で知ったのですが、当時、勝ち・負け組と分かれていた方々だったそうです。戦後計画南伯第1回の移民でしたので、多数の邦人の方が食物を持って出向いてくださいました。

ドウラードスの町は本通りの幅が広く（30m）、土道で土埃りが舞っていました。自動車はほとんどなく、カロッチ（馬車）が通っていました。

④ 松原の印象は？

・原始林を切り開いていかなければならないので、大変努力のかかる事と思いました。

⑤ 松原での仕事は？

・原始林を切り、山焼き、後片付け、陸稲を蒔き付け、2年目に入り山を切り、コーヒーを植え付け、陸稲、トーモロコシ、フェジヨン等間作を作り、順次コーヒーを植え付けていきました。

⑥ 畑では？

・1953年1年目には山焼き、後片付けをして陸稲を植え付けました。（半分は白穂で収穫なし（約1.5ha）。1954年2年目に入り、山切り、コーヒーを植え付けました（4000本、約7ha）。間作に陸稲、トーモロコシ、落花生、ジャガイモを植え付けました。1955年コーヒー園の手入れ、間作に陸稲、棉を作りました。1956年コーヒー園の手入れ、間作に陸稲、トーモロコシ、大豆、フェジヨン（豆）を作りました。1957年山を切り、コーヒーを植え付けました（6000本、約11ha）。間作に陸稲、トーモロコシ、フェジヨンを作りました。1958年コーヒー園のみでは霜害の危険を感じ、ポンカン500本、柿（タンバテ渋柿）を150本植え付けました（開拓面積約12ha）。1959年コー

ヒー園、果樹園、間作を作りました。

1960年コーヒー園、果樹園の手入れ、間作、陸稲、トーマロコシを植えつける。1961年山を切り、コーヒーを植えつける(10000本)。合計コーヒー樹が2万本となる。開拓面積合計25haとなる。これまでも人手不足のため現地人(ブラジル人)を雇って手入れをする。(1964年までは同じようにして営農を続けました。)

1965年耕運機トバタ(8馬力)を購入してコーヒー園の草取りを行いました。

1967年ドウラードス近郊(15km)イタポランに35haのコーヒー5000本植えた土地を購入しました。1968年イタポラン耕地にコーヒー10000本植え付けました。イタポラン耕地のコーヒー樹は1万5千本になりました。ブラジル人の家族を雇い入れてやりました。1969年松原耕地とイタポラン耕地を営農しました。

1970年新たにカンポグランデ市より西へ115kmの所ドイスイルモンズに60haの土地を購入しました。1971年松原耕地30ha、イタポラン耕地35ha、ドイスイルモンズ耕地60ha合計125haとなる。ドイスイルモンズ耕地にコーヒー1万本植え付けする。3耕地にブラジル人家族(4家族)を雇い営農を続けます。1972年ドイスイルモンズ耕地にコーヒー樹1万5千本植え付けする。3耕地の合計コーヒー樹は6万本となりました。1968年頃よりポンカン、柿が実り、近くの町へ売りに行きました。

1975年大霜害のためコーヒーの収穫がゼロとなり、経営が困難となり、イタポラン耕地を売却して難をのがれます。1976年松原耕地へ小型トラトルアグラリオ20(13馬力)を購入してコーヒーの除草を行う。松原30ha、ドイスイルモンズ60ha、計90ha。1977年コーヒー樹は4万5千本となる。1978年ドイスイルモンズ耕地で大豆、トーマロコシ、棉を作付けする。1979年松原耕地のポンカン樹、カンクロ病のため政府より役人が来て除草剤にて枯らされる。1980年松原耕地、ドイスイルモンズ耕地で営農を続ける。1981年同耕地でコーヒー、大豆、トーマロコシ、フェジョンを作ります。1988年まで続く。

1989年コーヒーの栽培に見切りをつけ、コーヒー樹を引き抜き、大豆、トーマロコシ、フェジョン、棉に段々と転換する。1996年まで続く。

1996年松原耕地は土質がミスタ(砂質)であるため、雑作(主に棉、トーマロコシ等)ができにくくなり売りました。1997年ドイスイルモンズ耕地で雑作を作っております。主に大豆、豆、トーマロコシ。

⑦ 行事などは？

・入植当初は組合を発足させ運営、後日本人会で運営しました。入植祭(3年目)を行いました。野球、相撲、ピンポン等ドウラードス市と近郊が集まり試合をしました。

⑧ 日本語教育は？

・ブラジル語を主として共同で学校を建て、親日家の先生にブラジル語を習いました。日本語はその間時々始めました。ポルトガル語を優先した関係で一世(日本生まれ)で数名の大学生を出しております。

⑨ 松原を離れたのは？

・1997年9月松原植民地の土地を売り、ドウラードス市へ出ております。年(77歳)と共に畑の仕事が大儀になり・・・。

⑩ 日本とブラジルの関係で大切なことは？

・文化の交流、人材の交流が大切と思います。将来日系の大統領を出すことが夢ですが、日系人(2世、3世)はブラジルの政治、経済、社会との付き合いが下手でポルトガル語の語彙力は優れていても、欧米の文化をベースとしたブラジル文化に根差したポルトガル語が案外話せないのではないのでしょうか。例えばピアータ(ユーモア)等。

⑪ 松原の生活を振り返って・・・

・入植時抽選で当たった土地より学校の近くへと考え、元の土地を変ったこと。変わった土地が松原植民地でも高い土地にあったことで度々の霜害をのがれたこと。だがその土地がテラミスタ(砂質)で地力が衰えたため売りました(1997年)。

那須 千草 (和歌山県三栖村出身)

- ① いつ？
 - ・1953年7月8日、8歳(1944年10月生まれ)。父、母、妹、弟、叔母(母の妹)の6名。
- ② サントスの印象は？
 - ・思い出せません。ただ父が私の服を引っ張って「母のそばに並びなさい」といったのを覚えています。下船するときのことです。
- ③ 松原に入るまでは？
 - ・面白かったのは汽車が薪を焚いて走ったことです。どこか場所や名前はわかりませんが、緑色のオーバーを着た若い女の人二人と男の人が、2~3ヶ所の踏切に自動車先回りして手を振って見送ってくれたのが思い出されます。何日かかったのか記憶はありません。
- ④ 松原の印象は？
 - ・川のそばにテント小屋を作り、家が出来上がるのを待ちました。毎日小魚を釣って楽しかったが、ガマガエルが多く怖い思いもしました。現在のカエル嫌いはそのせいかもしれません。
- ⑤ 松原での仕事は？
- ⑥ 畑では？
 - ・コーヒーが若木の時、コーヒー畑の間作にフェジヨン、ピーナッツ、ミーリョ、綿を蒔く。父の場合、土地を売却するまで(1988年)コーヒーだけでした。
- ⑦ 行事などは？
 - ・1970年までは相撲、野球、ピンポン、運動会、演芸会、その後麻雀大会がありました。
- ⑧ 日本語教育は？
 - ・1966年、67年青年会で中屋きよし氏を先生として行う。私はアシスタント、授業は日曜日に学校の教室を使用。1980年、近所の子供を集めて私個人の台所で、土曜日のみ日本語を教え始め、今日に至ります。
- ⑨ 松原を離れたのは？ (在住です)
- ⑩ 日本とブラジルの関係で大切なことは？
 - ・お互いの国の習慣をよく理解して日系人はよりいっそう日本語習得に努力してほしい。それが日伯友好に役立つと思います。
- ⑪ 松原の生活を振り返って・・・
 - ・1966年2月小川幸三郎氏一家皆殺し事件があったことです。この事件の少し前、クルパイ移民(和歌山移民)の青年がドウラードスにて殺人強盗を犯していたため、

復讐だともいわれました。犯人は逮捕されませんでした。

西尾 政枝（和歌山県西牟婁郡三栖村上三栖 753 番地出身）

① いつ？

・(1953年6月15日神戸港出発、第二船チャチャレンカ号) 1953年8月8日サントス港着。26歳。家族構成は、故夫熊治と二人の子供(女5歳、男3歳)、一人の青年中島常郎を私の弟として戸籍に入れて渡伯しました。

② サントスの印象は？

・サントスに着いたときは、ここがブラジルかと思っただけでした。

③ 松原に入るまでは？

・サントスより汽車に、薪を焚いて走るそれも荷物を積む貨車の後に私等に乗せた箱をつないで行ったり戻ったりしながら、途中バウル駅にて乗り換え。一晚天理教で泊めてもらって、また貨車の後車に乗ってどのくらいかかったか、イタウンという駅に着き、それより大きな荷馬車に乗り、土埃の中夜道を走ってドウラードスという町に着きました。ドウラードスの日本人会の皆様が迎えてくれ、その当時は西村様が日本人会長でした。親切におにぎりともそ汁と呼ばれて、まっすぐバヘロンというところの学校に着きました。

そこが一時の寝泊まりするところと決めていただいて、私たち二船の人は落ち着きました。赤土の畠の中に板張りの家でした。そこで松原植民地に入るまで女子と子供は生活が決まり、男の人は植民地に入る道作りに皆行きました。丁度私たちは12月初めにやっと土地を分けていただいて、山小屋ができたので主人と家族構成の青年中島さんが迎えに来てくれて入植することができました。

大きな木が横たわっていて着いてびっくり、2m×3mくらいの丸木小屋でヤシの木の葉の屋根でした。日本を出る時は、家もできている、井戸もあると聞いてきましたが、来てみてまたびっくりでした。

④ 松原の印象は？

・荒山で、きた当時は井戸はなし、水は川まで2kmあまり毎日水汲みでした。暑いのと不焼けになった木の片づけに必死で、5歳、3歳の子供たちは真っ黒になって目だけ光っており、洗ってやるに水もなく川まで連れていく始末でした。

まあ食物は松原様が貸してくださったので心強かった。一番先は米を少しの場所で山の木の片付いたところに植える。お陰様でその年は食べるだけとれた。モミでは食べられないので大きな木をくりぬいてウスを作り白米にする。

⑤ 松原での仕事は？

・雨の多い年で、木が不焼けで毎日木の片づけ、小さくして積み焼きして畠をこしらえる仕事。

⑥ 畑では？

・片付いたところには食物が一番必要ですので、米、豆等と他に果物、スイカ、マモン、南瓜と植え付けていく。肥料なしで何でもできるので、半年ほどでだいぶ片付いた。それで綿や落花生も植える。でも目的はコーヒーを植えるにブラジルにきているので、コーヒーの種を松原様が一家族に半俵ずつ貸してくれた。お金のある人はもっと別を買って植える。私の所は半俵だけ。1954年9月より木を割って、コウバと言って穴をほって種を入れ、木を割って蓋をして種植えが終わる。40日ほどで芽が出る。一緒に来た家族構成の青年はコーヒー植え付けを手伝ってくれず、半年ほどで植民地を出た。

⑦ 行事などは？

・日本人会があって、会長さんがいて1班、2班、3班・・・と組みを作り、入植3年祭を盛大にする。

⑧ 日本語教育は？

・日本語学校がなかったので、私のところは家庭で教える。

⑨ 松原を離れたのは？

⑩ 日本とブラジルの関係で大切なことは？

・言葉は、2世、3世になっても日本人である以上は日本語を伝えていきたいと思えます。

⑪ 松原の生活を振り返って・・・

・第一船、二船、三船と60家族が松原植民地に入植する。皆戦後のドサクサの時にブラジル移住に熱を燃やして、なんでも金の成る木を植えなければと、大きな夢を持ってみなコーヒーを植える。その当時は低いところには霜が降ることも知らず、土地だったらと皆一生懸命に割り当てられた土地を第二の人生の始まりとして働く。私の所はまあ高いところで一番良いところに決まる。3年目に霜が来るが、少し上葉が焦げる程度ですむ。5年、7年と度々大、小の霜が降る。低いところの人は手を挙げて、皆ぼつぼつと植民地を出始める。そのうちにコーヒーが最低値に下る。皆笑ったらコーヒーをくれるという時代が来る。

1975年にやっと私の所も主人と二人で30町歩を見事なコーヒー園にするが、その年の7月に全部真っ黒に霜にやられる。木の上の方を切って一枚でも青葉がある枝を残して再生する。それから2~3回霜があったが、起き上がりコボシみたいにもやられてもやられても起き上がって今日がある。丁度今年で45年になるが、コーヒーの一番古い木で44年生、一番新しいのは16年生。本数で3万本植えたのですが、2万5千本くらいまだあります。コーヒーの実のなるのは隔年で、今年是不作でした。去年は豊作でした。今のところ松原植民地でコーヒー作りは一軒になりましたが頑張っております。8年前に主人がなくなってから私一人でコーヒー作りに励んでおります。

振り返ってみますと一生コーヒー作りに生きてきました。これも松原様のお陰で今日があるものと毎日喜んで暮らしております。コーヒー作りのお陰で訪日も3回しま

した。入植当時の詳しいことを書きたいのですが、日本出発より書き始めた日記30年間の記録（1983年までの分）を日本より来られた方が移民の資料にするとのことでしたので提供してしまいました。

林 とみ代 (旧姓冨家) (和歌山県出身)

① いつ?

・1953年7月8日、19歳。親戚家族5人と弟と私。

② サントスの印象は?

・50年ぶりに大霜が降ってとても寒く、暑いと思ってきたブラジルにびっくりしました。毛布など荷物より出して被りました。

③ 松原に入るまでは?

・汽車(貨物)で5日間かかりました。汽車は薪を焚いて走るので汽車の中まで火の粉がとんできて、煙も入り、沿線は火事になったり、途中曠原に止まって洗濯をして乾くのをまったり、その間みんなで遊んだりしてとても悠長な旅でした。その時初めてエマという鳥を見ました。その時のことを思い出して作句しました。

踏青やエマ走る曠野大麻州

④ 松原の印象は?

・最初は土地の分配もできておらず、男性たちは道づくりから始めて大変でした。女性、子供はドラードの病院で合宿したり、川辺にテントを張って家が建つまで待ちました。その時、蝶の大群や野鹿、野豚、ワニ等に出会い、ターザンの映画その通りの大自然に浸り大感激でした。

⑤ 松原での仕事は?

・私は日本を出る時からクリチーバ市(パラナ州都)にいる同郷の人のところへ行く約束でしたので、ドラードには8ヶ月居りましたが、家事の手伝いをしていました。家族の人たちは山焼きをして木を倒し、整地をしてコーヒーの植え付けをしました。

⑥ 畑では?

・最初はコーヒーを植えて、低地では米を植えたり、トーマロコシ等のようなものでした。私は「松原」を出ましたのであまりよくわかりません。

⑦ 行事などは?

・私がいる間は開拓を始めたばかりで何もありませんでした。

⑧ 日本語教育は?

・土地の分配があるまで病院に合宿している間、移民の中に現職の先生が居りましたので、朝子供たちを集めてラジオ体操等しましたが、植民地に入ってからからは皆忙しくて私のいる間は何もありませんでした。

⑨ 松原を離れたのは?

・高校を卒業してブラジル移民が初めて開始され、同村出身の人より手紙や写真等送ってきて、外国映画を見て外国にあこがれていたこともあり、早速移住手続きをしたのですが、個人では渡伯が難しく、移民団の中に入って渡伯することになり、一応松原植民

地に入りました。8ヶ月知人の迎えを待ってパラナ州の州都クリチーバ市に移転しました。

⑩ 日本とブラジルの関係で大切なことは？

・お互いの国の習慣をよく理解することです。

⑪ 松原の生活を振り返って・・・

・その当時は開拓もできておらず、大変なところへ来たと思いました。大密林の中の生活に原始的な家を自分たちで作りに、ドラム缶風呂に入り、澄み切った空に大陸の月は大きく、涙を流してみたこと、また夕立がものすごく雷が大木を引き裂き稲妻が空を割るように走り、日本と異なる大自然の大仰さにびっくりしました。

夜、仕事も終わり電気のない掘立小屋で、父が持たせてくれた手で回す蓄音機でベートーベン等のクラシック音楽やコンパルシータタンゴ、またその当時有名だった菅原都々子の連絡船のうた等聞いたのが唯一の娯楽でした。

私と弟が知人の迎えで植民地を離れる時は、日本を出る時から一緒だった同航の方たちが植民地の出口まで送ってくださり、名残惜しく手を振って別れたことがとても印象的で、あれから45年経った今でも昨日のことのよう思い出します。

馬所 弘和 (和歌山県有田郡南広村出身)

- ① いつ？
 - ・10歳の時。父、母、兄、構成家族1人計5人。
- ② サントスの印象は？
 - ・当時バナナが安かったことは今でも印象に残っています。
- ③ 松原に入るまでは？
 - ・サントスからノロエステ線できましたが、バウルー駅では戦後初移民だったので熱い作り立てのおにぎりをいただいたのを覚えています。ドウラードスに夜着きましたが、道には牛が歩いていました。町の中に水たまりがあり、でこぼこ道だった。
- ④ 松原での印象は？
 - ・カフェの植え付け、米、ミーリョ、山切り等で日の出から日が入るまで働きました。
- ⑤ 松原での仕事は？
- ⑥ 畑では？
 - ・主にカフェでしたが、後に養蚕、牛と変わってきました。そして今またカフェを少しずつ植えています。
- ⑦ 行事などは？
 - ・野球、運動会、カラオケ等。
- ⑧ 日本語教育は？
 - ・ポ語は少しありましたが、日本語教育は家庭での会話のみ。
- ⑨ 松原を離れたのは？
 - ・現在ファチマドスールに住んでいますが、理由は子供たちの教育上。仕事は松原の土地で続けています。
- ⑩ 日本とブラジルの関係で大切なことは？
 - ・人間関係が一番大切だと思います。
- ⑪ 松原の生活を振り返って・・・
 - ・特に印象的だったことは初めてカフェの花が真っ白に咲いたとき。そして1975年の大霜で、次の日には葉が真っ黒になったこと。入植当時は住む家もできておらず40kmほど歩いたことは今でも忘れられません。山を伐採中にジャボチカバの実がなっていてそれで酒を造ったりもしました。

廣井 富二郎 (和歌山県出身)

① いつ？

・着伯 1955 年（昭和 31 年）5 月 21 日。家長廣井富二郎 32 歳、妻菊子 23 歳、弟正雄 23 歳（1977 年 7 月 30 日死亡）。

② サントスの印象は？

・小生は松原安太郎氏の呼寄せ移民として手続き中でありましたが、当時の大統領ゼツリオヴァルガス死亡により、松原氏の立場が悪くなり呼寄せ人を変更しました。また小生の家内の姉婿と小生の従兄弟が 1953 年に松原植民地に入植しておりました。小生等の入国査証はベレンで終了していました。サントス港への上陸時には呼寄せ人の福田秀吉氏と姉婿の納谷三郎氏の二人が出迎えてくれていました。

③ 松原に入るまでは？

・サントス港のホテル 1 泊。サンパウロ市 1 泊。サンパウロ市のエスタソールスよりマットグロッソ州のイタウン駅までの汽車の走行時間は 75 時間。イタウン駅よりドウラードス市まで約 65 km をバス（当時のバスはジャルジネイラという旧型です）で一日かかったのを覚えています。ドウラードス市のホテル（当時はペニソンです）で 1 泊。

④ 松原の印象 ⑤ 松原での仕事 ⑥ 畑 の項目を一括してまとめて書いていただきました。

1) 「松原」といわれる訳

・戦前移民である和歌山県日高郡岩代村出身の松原安太郎氏は、辛苦努力され、大成されてサンパウロ州のマリア市付近でファゼンダ（農場）を運営されておりました時、時の大統領ゼツリオヴァルガスが任期を終え、次期に再選されるべく立候補したときに、氏は経済的に支援しました。結果再選され、松原氏に対し南伯移民 4000 家族の導入枠を与えました。（北伯アマゾン方面は辻小太郎氏に 4000 家族の導入枠を授与。）氏は急ぎ日本に行き、日本外務省に伯国移民再開を伝えました。移民募集開始、これに応じたのは小野真次和歌山県知事であります。結果として戦後第一回南伯開拓移民として計 58 家族を送り出し、マットグロッソ州ドウラードス市の東に開拓中の連邦政府の植民地へ入植しました。この入植を世話したのが松原安太郎氏であります。入植した移民等は氏の姓の「松原」を借用して「松原植民地」「松原移民」と名付けました。

2) 松原移民の構成（1980 年サンパウロ総領事館に行き、移民台帳より記載）

・和歌山県人 52 家族、岡山県人 4 家族（満州よりの引揚者）、広島県人 1 家族（再渡航）、栃木県人 1 家族、計 58 家族の 313 名。オランダ船（ルイス号）、オランダ船（チャチャレンカ号）、日本船（あめりか丸）の三船に分乗して、1953 年の 7 月、8 月、10 月に入植しました。

現地は連邦政府が北伯難民救済のために 10000 ロッテ（1 ロッテ＝30ha）を開発中の時であり、途中 30 数 km までは道がありましたが、その先はありませんので移民の中の 15 歳以上の男子総出動で道を開き、各ロッテに入植したのは 1953 年の 10 月であります。全員食べる米を植え付けました。コーヒーを植えたのは 1954 年の 4 月先であります。1998 年までの残留者 7 家族。

3) 日本出発からサントス港上陸そして現在(1998年)まで

・小生は1955年5月21日に来伯した呼寄せ移民であります。1953年に来伯した松原移民ではありませんが、松原植民地へは直接入植しました。松原移民出発後、県の移民課へ行って手続き書類を提出しました。これと同時に大先輩移民である松原安太郎氏宛呼寄せ依頼の手紙を出して、その承諾を得たのでありますが、氏と懇意のゼツリオヴァルガス大統領が死亡されました関係で、松原氏の立場も悪くなり呼寄せも不可能になりました。それで和歌山県海外協会ブラジル支部長である竹中儀助氏に和歌山県出身者の誰かに呼び寄せていただくよう依頼の手紙を出しました。そこで引き受けてくれたのは福田秀吉氏でした。

移民手続き書類提出時に在伯していた親戚・知人の氏名

- (1) 家内の兄弟姉妹…姉とし子。姉婿納谷三郎(松原植民地在住)。妹とみ代。弟修。二人は松原移民として1953年に来伯しました。妹とみ代は入植後植民地を出て竹中儀助氏の秘書のような仕事をしていましたが、後、氏の仲介で日本の農業技術者と結婚してサンパウロに在住。修は当国の大学卒業後日系商社勤務、現在はツニブラ旅行者の取締役。
- (2) 小生の友人、知人、親戚…那須孫一。従兄弟、松原移民、ドウラードス市でメルセラリヤ経営。福田秀吉。小生の呼寄せ人。小生着伯13年後福田ファゼンダに行った時、氏と小生の父とは小学校は同級生であったことが判明しました。また小生は在日中に着伯と同時に直接松原植民地に行くことの承諾を得ていました。北方邦雄。小生の街より8km奥の村出身。1954年に竹中肥料よりの呼寄せで竹中肥料に入り、オーロベルデ肥料で大きくして事務取締役をしていました。退社後、汎ドウトラ花卉生産者協会農業技術指導員主任をやっておりましたが、1998年9月11日に死亡。
- (3) 小生は在日中に同上親戚や知人宛手紙を出して、サンパウロ州の百姓の様子、特にドウラードス地方の土地、天気の様子、地勢や作物の詳細等は一応了解しての来泊でしたので、入植当時の不便等には驚きませんでした。

小生等のサントス港上陸は1955年5月21日です。小生等の入国査証はアマゾン河口のベレンで終了してしまっていたから、上陸するだけでした。上陸時には呼寄せ人である福田秀吉氏と姉婿の納谷三郎兄の二人が来てくれていました。税関へは北方氏が出迎えてくれました。税関で夕方になりましたので、その晩はサントスの三笠ホテルに1泊。翌日は納谷兄に連れられて、サンパウロ市の旧メルカードの近くにある竹中儀助氏専用の事務所に行き、そこで妹の富家とみ代に会いました。竹中氏に連れられ総領事館に行き、携行資金はドル小切手で総より受け取り、同小切手は竹中氏に売却し、ブラジル金は後日ドウラードスへ送金していただくことにしました。その晩は竹中氏宅に1泊しました。その時に竹中氏の息子の竹中正氏に面会しました。

翌日はサンパウロのルース駅より奥地行き列車に乗り、翌早朝バウル駅着、下車。バスにてリンス着。納谷兄は、リンスには松原移民が入植したときに、移民と一緒に入植地まで同行した新聞記者がこれから行くホテルを経営していて、その人に長男をあずけているのでその子を一緒に連れ帰るためにリンスに来たのだ、と話していました。同夜はそのホテルに1泊しました。ホテルのサーラで日系人がカフェの販売に来ていて商売人との売買の話を聞いていました。「コッコ1俵を500ミルで買ってくれ」、仲買人は「もう収穫が始まっているから480ミルだ」「いやもう10ミル上げ

て買ってくれ」と粘っていました。4, 5 年先には小生もこの様に販売に苦勞する時代が来るのだなあと感じました。

翌早朝、リンス駅より薪の列車に乗りました。リンス駅付近は砂原でした。土地はだいぶ悪いようでした。パラナ川まで戦前の移民が大勢入植しているとのことでした。アラサツバ駅に停車したときには、駅前に日系商店の看板が二つ見えていましたから旧移民が大勢いるんだろうなあと思いました。パラナ川の鉄橋を渡るとき川幅の広いのには吃驚です。トレスラゴアス駅着。行けども行けども大カンポです。50 cm~1m くらいの蟻の巣がたくさん見えていました。全部酸性土壌のようです。植民地付近の土地は手紙を出して大体聞いて知ってはいますが、何時間もカンポの中を走っているとこれから行く植民地の土地のことも心配でなりません。カンポグランデ駅着。ここでまた別の薪列車に乗り換えます。

下車目的のイタウン駅着。ドウラードス行きバス乗車。バスといっても 1955 年頃の奥地のバスです。トランク等の荷物は全部屋根の上に乗せるジャジネイロ (*バス) です。ドウラードス市までは 70 km、夕方どうにかドウラードス市着で日系人のホテルに 1 泊。ジャンタ (*夕食) 後計算してみますと、サンパウロ市のルース駅よりイタウン駅までの走行距離は 75 時間でした。着いた晩に雨が降りました。翌日は曇りでしたが、納谷兄等が何日も世話になっている片山さん宅に行き、「今度移民してきた広井です。これから 2~3 年は世話になると思いますからよろしくお願いします。」と挨拶してきました。ホテルからの往復は土が 5 cm 程靴について歩けず大困りでした。ホテルに帰ると従兄弟の那須孫一君が来られ、着伯の挨拶をしました。10 日程前に霜が降りてカフェの新芽がちょっと焦げたと言っていました。今日はバスが出ないが明日は出るとの話でした。翌日は快晴、植民地までの途中 40 km くらいの所にピラブラジル (現在のファッチマドスール) という部落まで行くバスしかありません。そのバスに乗車。ピラブラジルの橋の所で下車 (川はドウラード川です)。橋の所へ植民地より二人迎えに来てくれていました。

今日は植民地の 4 ッカミニョン (*トラック) はドウラードスへ行ったとのこと。ピラブラジルから約 10 km 先にスピセーデという町までカミニョンの上に載って行き下車、これより先は道がありません。ただ松原植民地まで 15 km、日本人がつけた道があるきりです。スピセーデには椰子の葉で葺いた家が 5, 6 軒あったように思います。スピセーデよりしばらく歩いて納谷兄の家に着きました。家内の姉や三人の女の子に着伯の挨拶をし、当分ここで世話になることになりますからとお願いしました。家は山の丸木と椰子の割ったのと竹を割ったので周囲を囲い、屋根はタビンニヤといってセードロという木を 40 cm 程に切って板に割ったものを葺いた家です。この納谷兄の家で土地を入手するまで手伝いながらカルピーの勉強です。約 50 日後に納谷兄の土地より 1.5 km 東の土地を買い、いよいよ引っ越しです。

家は土壁と竹を割ったので囲い、屋根はタビンニヤ葺きの 3×6 m 位の家です。カフェの種は買っていましたので、約 3 アルケール程インプレタ (請合い) で切ってもらい、1 か月後に山焼き。半焼きでしたのでトランケール (焼跡整理) にだいぶ手間がかかりましたが、やっと終了。カフェを植えるためのマデラ作り、またリンヤ (3.75m 角にマルカすること) をすませ、やっと植え付け開始。カフェ植えの間に米、ミーリョ、フェジョンの植え付けです。土地を買ったときにブラジル人は 250

コーバばかり日本人のカフェ苗の捨てるのをもらって植えていたのが約30cmばかりになっていました。カフェの間作に植えた米は大不作。ミーリオ、フェジンは普通作でした。植えたカフェの収穫までの4年間は、豚を飼って豚脂とフェジンでの生活でした。

4年目に土地を買ったとき、植えていたカフェが約50俵のコッコがありました。これを全部日本から持ってきた籾米用の精米機でリンポして売却しました。皆が売っているコッコの値の2倍あまりに売れました。この話を友人を通じ日本人会に持ち込みました。最終的にカフェの出荷組合の設立となりました。しかし、在住日本人の1/3は組合設立、1/3は商売人向け、残りはドウラードス市にあった別の組合加入に別れました。小生等組合設立希望者21名は当時サンパウロ市にありました移住振興より借金をし、カフェマキナをカフェリンポにして販売しましたが、カフェにはIBCという政府の統制機関があり、税金や帳簿の記入は我々素人には難しいため、組合員全員CACコチア産業組合に加入する話になりました。この当時、組合法の改正のため各地域が組合を作り、他州までに発展している組合は地域組合がそれぞれ加入して中央会組織にするようになりました。

コチア組合の場合は、8組合が単協として加入してコチア産業組合中央会となった訳です。ですから中央の理事9名、単協からの審議会理事8名の17名の理事と3名の監事で運営することになりました。小生は単協理事9年のうち2期6年は理事長、その前半3年は中央会理事を務めました。そして1980年に単協ヘシーロ（*サイロ）を建設して理事を引退しました。しかし、カフェ担当役を引き受けてやっていました。カフェはちょっと衰退気味になってきました。反面大豆は1978年頃より好景気のようになり、ドウラードス単協にもシーロの必要性を感じ始め、1980年に小型ながらシーロを設立したわけです。

1985年頃より耳にするコチア産組のニュースははっきりとはわからないのですが、どうも面白くないことばかりでした。しかし、1985年頃にはコチア中央会が崩壊するとは思いませんでした。最終的には1993年に崩壊を発表したときから勘案しますと中央会の理事は粉飾決算を行い、審議会理事並びに中央会監事会もこれを認め、中央会総会へ出席していた。単協の代表である全代議員はこの粉飾決算を認めていたこととなります。中央会崩壊より6年余りになりますが、明確なる精算ができたということは聞いておりません。各単協傘下の各事業所は独立してそれぞれやっているようです。当ドウラードス事業所も別名の組合を設立してどうにかやっております。

当地帯は大豆、ミーリオ、フェジン、アルコドン等にとってはまだまだ新開地ですからよくできるのですが、CAC産組中央会の崩壊で傘下单協であった関係で別名組合であっても、中央会の悪評がいまだに出回っています。不景気風が吹き荒れたブラジル農業界関係の商社、各企業や銀行界共々失業者増大となりました。

反面、労働者不足となった日本への出稼ぎがブームとなりました。伯国より日本への出稼ぎ者は約20万人とかいわれています。御多分に漏れず小生の子供も6人行って、うち3人は帰ってきていますが、その中の1人はやっぱり日本の方が大分いいからまた行くのだと言っています。現在日本に残っている3人のうち1人は日本に行って6年半になりますが、時々電話のかかってくるときに、日本よりブラジルへは遊びに行ってもいいがもう帰る気はない、と言ってきます。小生もそれが本当だと、いつも言っています。

ポルトガル民族は昔から良い政治は行っていません。ブラジル国はもちろんヨーロッパへアフリカの奴隷を導入したのはポルトガル人です。アフリカその他の地区にポルトガルの植民地がたくさんありました（第2次大戦後、皆独立したようです）。ポルトガルの国民性が現在の悪い景気のブラジルになっているのです。やがてブラジルは経済に行き詰まると思います。小生は移民として来伯してきて43年になり、この間カフェを植え、その他の作物も手がけました。また協同組合関係の仕事に30年あまり力を入れてきました。結果が、やがて行き詰まったブラジルを見なければならぬことになりました。

⑦ 行事などは？

・植民地内では日本人会。対外的にはドウラードス地区約200km範囲の文化協会加入。

⑧ 日本語教育は？

・植民地内に日本語学校があり、日本語の勉強。

⑨ 松原を離れたのは？

・松原植民地で今尚住んでおります。

⑩ 日本とブラジルの関係で大切なことは？

・小生等は日本の小中学校当時、約500年前頃より徳川幕府時代へかけてスペイン、ポルトガル人が多く来日してきたことの真意を歴史の時間に教えてくれませんでした。ただ宗教関係のことばかりでした。来伯してきてからポース系民族はアフリカその他の未開発地の各所に植民地を作り、搾取している事実を知りました（第2次大戦後は大分独立したようです）。アフリカ奴隷をブラジル並びにヨーロッパに導入したのはポルトガル人です。各国より移民を入れたのは奴隷の代用であることも知りました。小生は子供等に奴隷や移民の例を挙げて、ポルトガル、スペイン民族は絶対信用してはならない、と強く教えています。但し5%くらいは信用できる人もいるということを含めて。

⑪ 松原の生活を振り返って・・・

・「松原」での生活というだけではありません。当伯国で43年生活して感じたことです。下記は日本も同じようなことが発生しています。NHKテレビに、毎日、政治家、企業家や一般国民の悪事ばかり写ります。当伯国は日本より悪事は大であり、数も多いようです。政治家の悪事はすぐ消えてしまいます。政治家と企業家の悪事を摘発する機関がない。警察は全然駄目のようです。役所の入札制度はほとんど談合である。議会自体は金で通過している。市議、州議、上下院議員や市、州、国の長の選挙は皆99%金で当選。銀行融資は1か月7～8%以上の高利融資である。組合の運営に責任観念がない。公的事業に政治が絡んでいる。その他にまだ多くあるが、書けば切りがありません。

() 註は廣井氏、(*) 註は中村。

柳生 豊彦

(*柳生氏はご自身の記録を寄稿してくださいましたので、ここに全文を掲載いたします。)

1953年5月15日神戸港にてインタオーショナルリス号(約2万5千トン級の船)に我々移民(第一船発)乗船。見送る人も行く人も互いに別れを惜しみ、テープが切れるともう再び逢えるか逢えないかわからない。出航するはずが、15日夕方和歌山県知事小野真次様が見送りに来てくださった。ずらりと並んだ二段ベッドに私と一緒に座りながら知事さんが目をやり、(とても狭いのう)とふとつぶやいたのを思い出す。段々と日が沈んできたが、なかなか出航せず見送り人も段々と人影が少なくなってきた。甲板に立っている者、ベッドに寝ている者、出航は今か今かと待ち構えくたびれている人、などさまざまだ。16日午前1時、やがて汽笛と銅鑼の音がけたたましく響き、誰の目にも涙が光っていた。丁度私の誕生日の日でもあった。

神戸港出航後、香港、シンガポール、ダーバン、ケープタウン、リオデジャネイロに寄港しつつ、7月8日54日間の航海が終わり、サントス港に着いた。移民達は南米ブラジルの大地に初の一步を印すことになった。しかし、54日間の長い船旅は決して安穩なものではなかった。途中で白系ロシア人達が大勢乗船して来たり、またインド洋の波は聞きしに勝る激しさだったり、いろいろあった。特に波はしばしばリス号を翻弄し、船客を恐怖に陥れた。波はとても高く、三角形のピラミッドのようで遠くの方を見ると島のように見える。こいつがぶつかるのだからたまらない。窓等は全部閉めた。船に弱い人達には誠に気の毒であった。あっちでもこっちでも酔ってゲーゲーと座り込む人が多い。島影一つ見えぬところで誠に心細い。

7月8日、最終目的港サントス港に着いた。前日から移民達は皆落ち着かない風で、しきりにごそごそと荷物をいじりだしていた。多分、夜税関を通り抜けたと記憶する。大勢の先輩移住者の出迎えを受けたが、顔が黒人と見まがうほど日焼けしている人もいた。薄暗い中で、旧移民がこの汽車に乗りなさいというがままに乗るが、木の腰掛でゴつゴつして戦争中の日本の汽車より座り心地はよろしからず。一つの腰掛に、僕と母と家内と生後9か月の赤ん坊の長女と、とても座れるはずがなく、わたしは腰掛の下にもぐって寝たが、線路の継ぎ目に来ればコンコンと頭がたたかれ眠れるはずがない。ひどいのは汽車の遅いこと。座席が固いうえに、窓からは機関車の焚く薪の火の粉が遠慮会釈なく飛び込んできて、うっかりすると衣服が焼かれるのである。そうかといって窓を閉めれば、気温が高いので暑苦しくてやりきれない。これではとてもマットグロッツとやらに連れて行かれるのが不安である。居眠りどころではない、油断も隙もならぬ旅で、これは予想外であった。発車したかと思えば後戻りしたり、駅のないところに止まって1時間も2時間も動かなかつたりすることもあった。何か故障でもしたのだろうか、とわざわざ汽車

から降りてみると、機関士達は川べりに座って魚釣りをしてわいわい言っている。「やれやれ

これがブラジルですかねえ」とそばの人が言ったので、「そうですねえ」と答えた。

鉄道沿線の風景は大陸的であった。コーヒー園、地平線まで続く大牧場で草を食べている牛の大群、ミカン畑、緑の絨毯を敷き詰めたような広い広い砂糖キビ畑、と。夕方になると気温が下がって涼しくなった。煙と火の粉は依然たるものであったが、夜は闇の中でそれは花火に変わった。花火が窓外を流れ去る光景は、あたかも千万の蛍が乱れ飛ぶかのようなようだった。これはまた予想外の美観であった。汽車は悠揚迫らず走る。駅での停車は予想つかないなど、一行の誰もが自分は性急な人間だと思っている人はいないのだが、皆いらいらさせられている。顔を見合わせて、苦笑に不快を紛らせるのが精一杯である。急峻な山々があり、高原を支える断崖をなしているのだが、列車は絶壁というに近い山腹にピタリと吸い付く形でうねりくねりながら気長に登っていく。

途中バウルという街につき、この駅より先はノロエステ鉄道といってサンパウロ州、マットグロッソ州を横断して、隣国のボリビアまで行く鉄道であるが、それに乗る。我々は戦後第1回目の移民であるためか、各駅毎に多数の旧移民の方々の出迎えを受けた。それは苦しい戦争に堪えてきた私達には心強く感じた。一番困ったのは旧移民の方々の質問で、日本が戦争で勝ったのか、それとも負けたのかということだった。

5日間汽車の旅を終えて最終地点イタウンというとても辺鄙な殺風景な駅に着いた。誰も彼もが足が痛い、腰が痛いと言っている、もう夕方であった。旧移民の方々がトラック3台を並べて、「このカミニョンに乗ってください。ドウラードスに行きますから」と言ってきた。またこれからどれだけ乗るのかと思い、皆それぞれの荷物をトラックに積み、分乗した。再び車の人となるが、土煙を巻き上げどンドン走るので、誰の顔も汗と赤土のほこりで真っ赤である。灌木の中をトラックが走る。

約60kmほど走っただろうか。ポツンポツンと家らしいものが見えてきた。45年前はあまりブラジルで名も知られていない寒村であった。当時ドウラードスには日本人会というものがなく、新移民がこちらに入植するということで急に日本人会ができたらしい。初代の日本人会長は熊本県出身の西村嘉平治さんだった。もう夜中だったと思うが会長さん宅で22家族の人達が夕食をいただいた。夕食のときの会長さんの挨拶に、「あんた方ブラジルにきて、日本にいるよりブラジルの方がよかバツテン」という言葉があり、こちらは腹がすいているので「バツテン」も「よか」もなく、パクパクと夕食をいただくのに一生懸命だった。腹いっぱいになれば眠気がさしてくる。会長さんに「誰がどこに寝してくれますのや」と質問すれば、「あんた方はこれからまだズーッと先のセラリーヤ（今はインダポリス）に連邦政府の病院があるバイ、そこに一時落ち着くのや」と言う。「へへえ、まだこれから先に行くのか」と皆顔を見合わせるばかり。2時間後またトラックに分乗して所謂連邦政府の病院とやりに40分ほどで着いた。板張りの建物はまあまあだが、果たして22家族の人達が入れるだろうか。窓はあるにはあるが、ガラス1枚もない。ブラジルは冬の時期に入っているし、窓から風が吹き込んでくる。

これから病院での共同生活に入る。削木の屋根に板壁で、内部はガラシとして何の仕切りもない。床の上にマットを敷き、家族の人員によって広狭の差をつけ、荷物で区切りをつける。2本のドラム缶で湯を沸かし、四方に柱を立ててぐるり布で囲って浴場とし、夜に浴びる。時々風が吹けば丸見えになることもある。炊事当番を作って食事を作る順番が回ってきたが、大方雑炊だったと思う。病院の側にブラジル人が点々として家を建てていて、畑にはナンバ、マンジョーカ芋等植えたり、マモンの木があつたりしてよく黙っていただいたものだ。マモンを塩もみにしてよく漬物にした。

この病院を起点に約20km先の川べりに天幕を張って、男全部と子供達（男の子の大きい方）は皆道作りをした。最初スピセージ、後にビラビセンチーナに、第1船第2船第3船合同で道作り作業をした。それは松原植民地への通路でもあり、二抱えもある大木もあって我々には強敵であった。周りは昼間なお薄暗い大森林である。当時は乾燥期であったため都合がよかった。また家長達のほとんどが兵隊あがりばかりでとても心強く思った。責任者の方達は、「8月頃に山を各自に分配して、山切り、山焼き、そして蒔き付けと順序があるが、まだ植民地の入口でモソモソと日が経っているばかりでこんなことでは入植どころではない」と思ったのか、次から次へとブラジル人、パラグアイ人を大勢雇ってきた。彼らの手際よさを我々はただ「えらいもんや、やっぱり餅は餅屋だ」と感心するばかり。「まあ日本人は大根切のようなもんやなあ」とも嘆く。

ここはオンサ（豹）も出るところからトラベツソンオンサとも名付けた。大きな木の根を残して、日本政府から戴いたシボレーの小さなトラックが通れるだけの道幅をつけて行った。なかなかちょっとやそつには進まなかった。吸水に不馴れな日本人達はアメーバ赤痢にかかった。吹き出物ができたりもした。病院の集団生活も大勢のせい空気が悪く、小さい子供達が次々と病気にかかり、どうしたものだろうかと思案した挙句、分散して住む方がよいということになった。私から責任者に言ってくれというので、責任者にはなしたところ、「ここから別の所に出れば集団生活を乱すことになる」とけんもほろろの回答であった。軍隊より難しい。軍隊なら自分一人だけだが、今は家族を連れている。再三交渉の末、約6km離れた所に連邦政府の役人の官舎の空き家があり、そこに5家族が移り住んだ。お陰で子供達の病気も段々と快方に向かった。

男達はよくピング（ブラジルの酒）を飲んだ。何か月かかかって、やっと耕地の割り当ての抽選の時が来た。誰も彼もが素人ばかりで、土地の良い悪いもわからず、抽選に当たった場所にそれぞれ行く。しかし、行ったところで大原始林。男手の大勢いる家族にはかなわない。私は一人で大きな木をぐるぐると廻ったが、手の施しようがない。日本で家を買ってきた携行資金に手が伸びる。最初手まね足まねでブラジル人と交渉するが、さっぱり通じない。半日かかってやっと半アルケール3コントスで頼んだ。彼らは今が金儲けと、仲間をたくさん連れてきて仕事をする。言葉が通じないため、両方で多分悪口ばかり言っているのだろう。

山伐りしてあまり日もないのに、蒔き時ばかり急いだため山は焼けず不焼になった。不焼に

なった木々の間から若芽が生えてくる。これこそ大変だ。原始林の伐採よりも厄介だ。またまたブラジル人に4コントス支払い、半アルケールに計7コントスも使った。朝露や夕露は体に障るといわれるが、一時も早く家族で住める小屋を建てたい、蒔付けの準備もしなければならん、と朝には星をいただいて出て、夕には月影を踏んで帰る状態だった。玉の汗どころか、全身絞るような汗に濡れ、まるで競争のように働き続けた。

あまりのひどさにうんざりもした。木を切り損ね、あるいは焼き損ねて無残な再生林のようになっている様子は、何の経験もない身にもまさに「最悪の土地」とみてとれたのである。山の燃えさかる火の渦、打ち合う焰の地響きや雷鳴にも似た轟は、戦慄を禁じ得ない。夜になると枯れ木の立ち木に火が移って、まるで万燈を掲げた如くになり、風に散る火の粉は怖い中にも美しく壮観でさえあった。

ブラジル人は、伐採中枯れ木は絶対に手を付けない。伐採の最中、枯れ枝が上から落ちてくる危険があるからである。不慮の山焼きだったから焼け残りの箇所が多く、その寄せ焼きと木の整理は日時を要し、白灰の上に照りつける日光の反射のきつさに目を痛める者も多かった。焼け木、焼け枝の始末は顔も手も衣類も真っ黒になる。皆シャツが汚れ、ベトベトになり、身にまとうのが面倒にもなる。猿股一つになって働いたこともあったが、その晩ひどい熱が出て日射病になってしまった。

念願の掘立小屋作りである。まず前から50mほどの所を整地して、木の焼け残りなどを家内と探し回って集め、重いものはブラジル人に任してぼつぼつと少しずつ建て始めた。タビンニヤといって厚さ1cm、幅15cm、長さ40cm程に木を割って板を作り、それを屋根に張って作った掘立小屋である。5m四方の掘立小屋でもある。

夕方、屋根も葺きあげて、外側には丸太を葛でしばって、やれやれと一息ついているところに思いがけなく大雨が降ってきた。立派に葺いたはずの屋根から雨漏りがする。家の中を अच्छこつちと布団や柳行李を引っ張り回る。そのうち雨漏りだけでなく、腰が抜けるような雷鳴もし、大粒の雨音にどんなになるのかと不安に思ったくらいだ。傘をさして雨漏りを凌ぎながら、こんな下手な家を建てると恨めしいような顔をしていた家内も、耳を塞いで行李の上につつぶしている。翌日、雷鳴や豪雨の話が出たが、雨漏りの話がない。タビンニヤの木は、美しく真っすぐにして張るものだと聞いて、なるほどと思った。

耕地から下に300mの所にコルグフンド（深い川）という川が流れていて、時々ナンバリンという小魚が泳いでいた。その川に水を汲みに一日幾回ともなく行くのであるが、当時は皆担ぐか、手に下げるかで他にしようがない。坂から降りてきて水を担いで登っていくのだから、チャブチャブと頭から背中一面水浸しで、家に着いた時には石油缶に三分の一ほどしか残っていない。

早く井戸を掘って少しでも楽になりたいと、トンガで土を掘り始めたが、スコップもなければ何の道具もない。広く掘ったら水の量も多いだろうと、直径1m30cmの穴をコツコツとこまめに掘るが、なかなか難工事であった。日本で土方でもしていればよかった、そうすればこ

んな時に間に合ったのだが、と思ったが腰が痛くなってやりきれたものではない。しかも炎天燃える如くの暑さである。

三日目の昼頃、ブラジル人が大きな荷物を担いで、僕が穴を掘っている姿を見てボソボソ小声で話している。こちらは言葉がわからないから素知らぬ顔をしていると、手まねで、お前一人で掘ったって水が出ねえ、親指と人差し指の間をすけて、これっぽっちしか掘れんじやないか、と大笑いしている。手の指3本立てて掘るまねをした。こいつら井戸掘りか、とその時思った。彼らは荷物の中から紐を取り出して、右手の大きな指と人差し指を広げて紐を計っている。何をするのかとみていると、長い長い紐を二人で引っ張って、この紐の長さを見ろというのだろう、約10m引っ張っている。井戸の深さをいうのだろう。右手の親指と人差し指を動かして、左の指3本を立てた。こちらが反対に右手で親指と人差し指を動かして、ノーと言う。彼らは急ぎもあわてもせず、地に腰を下ろしてゆったりと構えている。

その時考えた。井戸を家内と二人で掘るということは、家内は女である、不可能なことである。いつまでも川からの水汲みもできぬ。井戸を掘るまねをして、右手の指3本を立てて1本曲げた。二人の男はしきりに手を左右に振る。押し問答の末、200(*ママ)引くということで決着して、彼らは荷物の中から天幕を出して家の側に天幕小屋を作った。段々と日が暮れて、こちらはランプを灯し、彼等は暗がりでごソゴソとしていた。夜の明けるのを待っていたのか、二人は井戸掘りにかかり、みるみるうちに1mの深さになった。二人は黒人で、背と鼻が高く恐ろしそうな男と、もう一人はセメント樽のように大きいがおとなしそうな男である。この国で井戸掘り人夫をやるからには、特に性質温順な他人の恨みをかうような者は地の底では働けないという。もっともだと思う。12時まで働いて、暑いのでテントの中でグウグウと寝て、午後4時頃起きてくる。仕事をするのかと思うと、鉄砲を取り出して山の中へ入っていった。

二人のひげ男達は約半日井戸掘りをして、後半日は森の中に野豚とか鹿射ちに行くのが日課のようになった。年取った母がぶつぶつと小言を言いだした。早う井戸掘って帰ってくれば、とそればかり言う。10m程掘った頃、午後からまた二人は森の中に行き、夕方大きな鹿を1頭二人で担いできて料理をし始めた。たくさん肉を食べるとくれたが、長い間肉に欠乏していたためとても美味かった。母は廻る世間に鬼はいないと独り言を言っていた。

ヒゲさんと仲良しになって、とても親切にしてくれた。三日程するとドロドロの土と水が上ってきた。水が出てきた。深くなるほど仕事が進まず、12mまで掘った。だいぶ水らしくなって、ヒゲさんが右の親指を上を上げて、よいと言う。但し真っ赤な水で飲む水ではない。ヒゲさん達二人は、うまそうに僕の目の前でごくごく飲み、僕にコップに水を汲んで渡し、飲んでみる、と言う。まあお付き合いに飲むが、土の臭いや泥の臭いが鼻に刺してくる。しかも水量の乏しい井戸から石油缶で巻き上げるのだから、まるで泥水である。日本から持ってきた樽の底に目の粗い布を敷き、たくさん炭を入れ、またその上に砂を入れて、水を濾す装置にして飲料水に充てました。ようやく臭いもなくきれいな水が樽の底から出てきた。

また当時は、ただ体をふくだけで、何とかして風呂をと考えたがどうしようもなかった。ト

ラックが1台、それが62家族を支えている唯一の食料運搬車であって、余計なものは取り扱ってもらえない。雨が降れば道が泥々になったり、車が落ち込めば乗っている人達が降りて引張ったり、動かないときには夜通し車の側で寝たりしたものだ。道たるや凸凹で、おまけに大きな根をよけて通った。小さく突き出た根もあって時間がかかった。当時はファチマドスールをピラブラジルと呼んでいたが、そこに吹けば飛ぶような小さな一文店ができた。交通の便は自分の足だ。誰も彼も20kmや30kmを歩くのが普通のように思っていた。自分の足より他に方法がないからである。

ピラブラジルの入口にだいぶ大きな川が流れている。この川を渡らなければ、ピラブラジルにも松原植民地にも入ることができない。幅300m程あるだろうか。兩岸にワイヤーを渡し、ドラム缶30個を繋ぎ合わせ、その上に板を四角に括りつけ、手すりを付けたバルサ（渡し船）で、水流を利用してワイヤーを伝って行くのである。日が暮れると渡し船が止まってしまう、にっちもさっちもいなくなり、川べりで蚊と戦いながら野宿である。空腹のまま夜明けを待つ。昼は昼でブトと戦い、夜は川辺に多い蚊と戦う。

日を重ねていくうちに、向こう側の川べりにヤシの葉で葺いた宿ができた。掘立小屋である。経営者はこの近辺の親分で、手まねで凄い話を聞かされる。三か月もの間に次から次へと掘立小屋のめし屋ができた。さらに段々と掘立小屋ができて、小屋も大きい。ここに宿泊することもでき、宿泊賃と夕食で3ミル。その当時カマラーダ（日雇い）1日の賃金2ミルである。

また丁度その頃、西部劇に出てくるジャルジネイラという後ろ半分が荷物台、前半分が木の腰掛で、シートを両方からぶら下げて雨の時覆いをするようなバスが走っていた。そのバスがドウラードスとピラブラジル間1日1回往復するようになった。小屋の経営者は、包丁、ピストルを服の前に突っ込んで、小屋の中には大きな長い軍刀のようなものが吊ってあって、どうも近寄れない感じがする。この宿屋で泊まれば、次の日背中節々が痛くてやりきれない。丸点棒の寝台で毛布1枚貸してくれるが、その毛布たるやボロボロで、変に臭くて、体が温かくなってくるとキチキチと虫がかむ。十分に眠れないが、まあ野宿よりも安全である。ある時はこの川が氾濫して、沿岸の道に1m余り水が溢れ、滝のようになって原始林の中へ流れ込んでいる。

竈も土を練って煉瓦を作り、土の上に置ただけで、山から焼け木を引きずってくべておく。当時はフェジョン（豆）を日本式の金時豆のように炊いて、そればかりを食べたので飽きてしまった。但しこの豆はブラジル式にすると、毎日続けても飽きない。もうこの頃では鳥が鍋をひっくり返したり、寝床に来て走り回ったりしても気にならない。我々には日曜日も祭日もない、ただ働くばかりである。日本で農業や山仕事をしていた人達は、何ととっても仕事の段取りがいいが、百姓の経験のない我々は仕事が遅れるばかりである。井戸掘りのヒゲさん二人が別の場所に行き、井戸の水も日に日に増してきたが、相も変わらず赤茶色をしている。

或る日のこと、子供がフェジヨンの甘煮を食べすぎて、毎日熱が下がらず、ビラブラジルの小店にアスピリーナを買いに歩いて行った。道の側のブラジル人の掘立小屋の中で、鍛冶屋さんでもしているのか、鉄をたたく音がした。横に中古のドラム缶が転がっている。このドラム缶に目が止まった。小屋の中に入って、「ボアタルジ（こんにちは）」と言った。鉄をたたいていた黒人の男がジロジロとこちらを見ている。手まねでこのドラム缶の値段を聞いた。男は「シン、シン」と愛想の良い返事で右の指を4本立てた。日雇い人夫の2日分の日当だ。どうしてもこのドラム缶がほしい。まず金の入ったポケットを捜す。3ミル70センターボを掴み、これしかない、と金を見せると愛想よく「シン、シン」と言った。3ミル70センターボを男の手に渡して、ドラム缶の上から下に7分目に切ってほしいと頼んだ。男は、合点したとばかりにタガネでコンコンと丁寧に取り取ってくれたが、縁がギザギザで危なくて手が切れそうなので、このギザギザをすぐ取ってくれ、と更に頼んだ。それも丁寧に2時間ほどかかって、ツルツルになるまで磨いてくれた。

このドラム缶の切った上の方は男にやろうと思ったが、「洗濯するのによいから持っていけ」と言うのである。肩に担いで下の缶だけでも22kmの道を歩いていくのだから、と手ぶり身ぶりで言った。すると、「ほほう、ジャポネーズ、22kmは大変だなあ」と同情した表情をする。だいたい太陽が斜めになっている。早くいかねば大変だ、と早々に小屋を出た。

最初担いだ時は案外軽く、これなら担げるわいと思った。1時間2時間歩くうちに段々と重くなってくる。あたりが薄暗くなって、スピセージに来た頃は真っ暗になった。これから関所である。トラッベソンオンサの入口である。いよいよトラッベソンオンサに入る恐さ、寂しさに似た緊張感に身が引き締まる。暫く進むと、前方の暗がりから人とも猿とも見分けのつかぬものが飛び出してきた。原住民だろうかと思っていると、日本語を話し出した。沖縄県人だと言った。顔中髭だらけ、というより髭の中から目鼻がのぞいているようだ。この髭さんが曰く、「あんたらも一年したら、わしの如くなるけんのう」。

なにぶん大きな根を残して曲がりくねりの道である。右に行ったかと思えば左に曲がり、夜の原始林の中を、唯一人ドラム缶を担いでせせと歩くが木の根につまづくこともある。かすかな月明かりが段々と暗くなって、急に森林の木が左右に動き出した。上を向いても大木の間からは星一つ見えず、そうこうしているうちにオンサの遠吠えに身がよだって来る。オンサの哭声は赤ん坊の泣き声とほとんど同じで、おぎゃおぎゃと哭く。

その時、バラバラバラと一体何の音だろうと思っていると、ダダダと大雨が降ってきた。考える間もないのである。担いでいるドラム缶を下ろしてひっくり返し、頭からドラム缶をかぶり、その場にあぐらをかいて座るが、とても窮屈である。が、これなら雨を防げるし、いろいろな動物が出てきても恐ろしくない。そう思っていると座っている尻の下に水が流れてきて、とても冷たく、そして中腰になればドラム缶の重さにうんざりという状態になった。世の中はうまくいくようでもうまくいかないことが多いとつくづく思った。

朝の日の出頃、やっと家にたどり着いた。母や家内が口を揃えて、「もう殺されたのかと思ひ、とても心配した」と言う。腹がペコペコでしかも疲労で口も開けず、ゴロツとドラム缶を

置くと同時に寝てしまった。4時間程眠って気が付くと、もう手から足からブトがいっぱいたかってかゆくてならない。雨が降っている間は、涼しくてブトも蚊もでないが、日が照り出すとブトの出撃である。原始林に馴れるまではできものができたり、目をやられたりした。目を患ったならば、丁度目の中を荒ほうきでかき回されるが如く、痛くて寝ても立ってもいられない。初めに誰もが味わう目痛だ。

井戸から水が出たということは有り難いことだ。水がないほど不自由で不潔なことはない。バケツに直径 15 cm位の芯棒をつけ、人差し指大の綱を結んで巻き上げる。一卷き一卷きとバケツの中の水が上に上がって来る。そんな時、赤い夕陽が原始林の中に沈んでいくのを眺めると、なぜか日本を恋しく想ってくる。

家内と二人で、食べる時間も惜しんで、朝から風呂作りをする。暑い太陽のもとで、二人引きの鋸で木を切って、太い木と木の間にはドラム缶を乗せて一応の準備をしたが、開きっぱなしの風呂じゃどうもきまりが悪い、と家内が言う。そこで四方に柱を立てて、布を張り巡らして浴場を作った。小さなバケツをぐるぐると何回ともなく巻いて、水をドラム缶に入れた。その度に段々と水の色が赤茶色になって、終わりにはドロを汲み上げてきた。井戸の水位がなく、まだ上面だけ水だった。ドラム缶の中には7分目の赤い水が貯まった。

家内が中を覗いてみると、あまりにきたない水で、「風呂に入るのか、汚れに入るのかわからん」と言う。それでも暗くなるのが待ち遠しく、やや暗くなってきたのでドラム缶の下に火を点けた。暑いから風呂の水も1時間余りで湯になった。一番先に入ったが、ドラム缶の中にゲス板をつけるのを忘れて、足が熱くて入ってられない。大声で、家内に日本から持ってきた下駄を持ってきてもらい、下駄をはいて湯につかった。日本を出発して初めての風呂で、気持ちの良いことといったら温泉以上である。順番に母、家内、子供、と入ったが、赤土の水のためかいつまでも体がポカポカとしている。

風呂や井戸ばかりにかかっているはいられない。焼け跡を始末して、コーヒーの蒔き付けに取り掛からなければならない。30mから40mの針金に、3.5m間隔にその人その人の思い思いの赤や白の布切れを結んで、両端を竿につけて引き締め、布切れの下に鍬で印をつける。縦横に印をつけ終わってから、印の下に20~30 cm×50 cm、深さ20 cm位の穴を掘り、その中に8粒から10粒位の種を蒔く。その上に木を割って薪のようにして、直射日光が入らないように、また土砂や枯葉が入らないように蓋をしておく。人数が少ない家は互いに手伝わなければならない仕事である。

日本と違って四季の区別がはっきりしない。気を遣うのは9月から2月までの雨期、2月から8月頃までの乾燥期の区別で、雨期の初めは蒔き付け時期、乾燥期の初めは収穫期で、後は準備期である。雨期に入るまでにコーヒーを蒔き、米、フェジョン等はコーヒーの間に間作の用意をしておくのである。入植以来、4~5か月たったが、どの家にも野菜がない。作る暇がないのである。老人にふさわしい仕事でもある野菜作りでも水がないのである。殊に今年は雨が

遅いといわれる。ぐずぐずしている中に12月頃となってしまった。

シャツはほとんど切れて、塩や砂糖の袋、それに日本から持って来た着物でシャツを作ったりしたが、体裁のいいものではない。黒地のものは二倍暑くて、ブトがより多くたかってくる。植民地の土地は雑作ばかりすると落ち着かず、多年生の作物を植えれば自ずと人の気も落ち着くと言われる。そのためか、コーヒー栽培を奨励するので皆熱中する。また植民地の人達は十人十色で、顔や心が違うだけでなく、各自違った技能・技術を身につけているので、それらを持ち寄って生活している。

雨期が遅いといわれた年だが、雨が降り出してきた。それも日本の梅雨のようではなくスコールのような。マツグロソ州はサンパウロ州とは気候も違っている。降る、鳴る、光る、の三調子で、屋根の削木を叩く音は耳を聳するばかりである。最初は怖がった人々も段々馴れてきた。というよりも苦しさの中からも強く生きる道を見出していくのが人間の本性であるかもしれない。雨が降ると、湯飲み、鍋、釜等炊事道具をはじめ、およそ水の溜まるものなら何でも軒下に持ち出して受けるのである。車軸を流すように降るが、長降りはしない。だから風呂のドラム缶に水を入れるのは、降っている間に全身びしょぬれになって汲み入れるのである。

11月2日はブラジルのお盆である。この頃から2月頃までの暑さを真夏というのであろう。正月になっても正月気分がでない。汗を流して西瓜をほおぼりながら、「あけましておめでとう」では何としてもトンチンカンである。和歌山の冬、紀州の秋などを語って、せめて心だけでも冷やそうと笑った。

雨期のお陰で、野菜もぼつぼつとできてきたが、何分素人のこと。半アルケールに間作として植えた稲も大きな株となってドンドン伸びてきて、大豊作と思いきや植えた種は半俵30kg。株は大きくなったが、出穂時に雨が降らないと白穂である。その時は運悪く潤いがなく、どこの家も収穫がなかった。自分の蒔いた種は、それこそ不出来でも今年1年の食料は獲れると期待するが、何か月たっても穂が出ず、その上風通しが悪いため、折角芽を出したコーヒーまでむれてしまい、5千本植えたコーヒーのうち、半分がむれてほとんどが真っ黒に枯れてしまった。一年間営々と働き続けたが、主食たる米とコーヒーの半分が枯れて天をうらめしく思った。しかし、芋、マンジョーカ等の栽培、食べ方を覚え、腹の中のやりくりはどうにかついできた。

日本人会の設立と教育が問題となり、植民地の人達が皆団結してきた。そして、やがて松原植民地日本人会と日本語学校が誕生した。

顧みれば松原植民地の方々は、誰も彼もが子供の教育には熱心で、たくさんの子供達あるいは二世達は現在ブラジル国の重要なポストにあって活躍しており、おそらく松原植民地ほど教育を与えた親達の熱心さが窺われる所は、他にそうないと思われる。

和歌山県出身の松原安太郎氏のお陰で我々は入植することになったのであるが、おそらく誰もが昼間でも薄暗い未踏の地に入るとは夢にも思わなかつただろう。原始林の中に入るとどんな暑い時でもヒヤッとしている。下は丁度スポンジの上を歩くかのようにフワフワとしている。木の上を見れば、猿が幾十匹も連なって、尾を木の枝に「キャッキャッ」とこちらに來いとでも言っているようだ。そうかと思うとケッシュャードという野豚が50~60匹列を作って、ザーザーと走ってくる。山に入れば山のダニが足についてくる。それに蛇。わけのわからぬ動物がいっぱいだ。旧移民だけれども、日本に引き揚げて再び渡航した人で花岡さんという人がいて、いろいろと教えてもらいとても助かった。

蛇に脅かされながら枯れたコーヒーを抜き取り、新たに植えた苗木が段々成長してゆく。そして今度こそは、と、米、ナンバ豆等をコーヒーの間作に、時を遅らせないようにと心を配る。しかし、段々と農作物の暴落で心が暗くなる。

ブラジル到着当時の几帳面さは誰からも去って、ただ仕事だけに精を出している。今日は何月何日何曜日などといっても、ぼんやりとしてはっきり答えられる人は少ない。また、3年が過ぎた頃、服装たるやチンドン屋顔負けで、青や黄色、黒色の布でつぎはぎだらけである。みんながそうであるから恥ずかしくない。その後、病人もたくさん出たし、亡くなった人もいる。開拓半ばで、はるばる日本からきて亡くなった方は本当に気の毒この上もなかった。家族の多い人達は、どんとんと山を開拓して次から次へとコーヒーを植えていった。

松原植民地の中央の高地は、日本人会会館、日本語学校建設用地と定めて、共同で植民地のいろいろな催しをする。その費用を補うためにコーヒー植えをした。だから自分の仕事ばかりしてられない。会館造りだ、学校造りだ、道路作業だ、橋造りだ、と次から次にどんとんと仕事が増えるばかりである。

年々少しずつ山を切っていった日本人の耕地の間に、ブラジル人もぼつぼつと入ってくる。よくブラジル人に「日本人は休むことを知らない、ちょうど蟻のようだ。」と言われ笑われた。入植3周年行事を行った人たちが大変だった。4年目頃からコーヒーの木の頭が道から少しだけ見えるようになってきた。整然と立ち並ぶその姿が神々しく見えたものである。

5年目が来た。コーヒーは1年でとても大きくなってきたが、何よりも恐ろしい強敵は霜である。5月頃から9月末頃までが心配で、寒い晩は寒暖計とにらめっこするのである。

その年々によって違ってくるが、9月7日ブラジルの独立記念日頃にコーヒーの一番花が咲き始める。コーヒーのこの開花は雨が降らなければいつまでも蕾がローソクのような長い形で、雨と同時に開花して真っ白い花が一面に咲く。そしてその香りたるやとても良い香りで何とも言えない。小雨の降る朝、家の中に寝ていても誰でもが花が咲いたことがわかる。そんな時、思わず目から涙が出てきた。

これまで野球、角力、運動会、演芸会、映画の会等だんだんと楽しみも増えてきた。植民地の中をバスが通るようになった。ほとんどの家で自家用車を持つようになった。大きなトラッ

クにコーヒーの山を積んで出荷することが夢だったが、それも今や実現し、その喜びに胸がいっぱいになる。

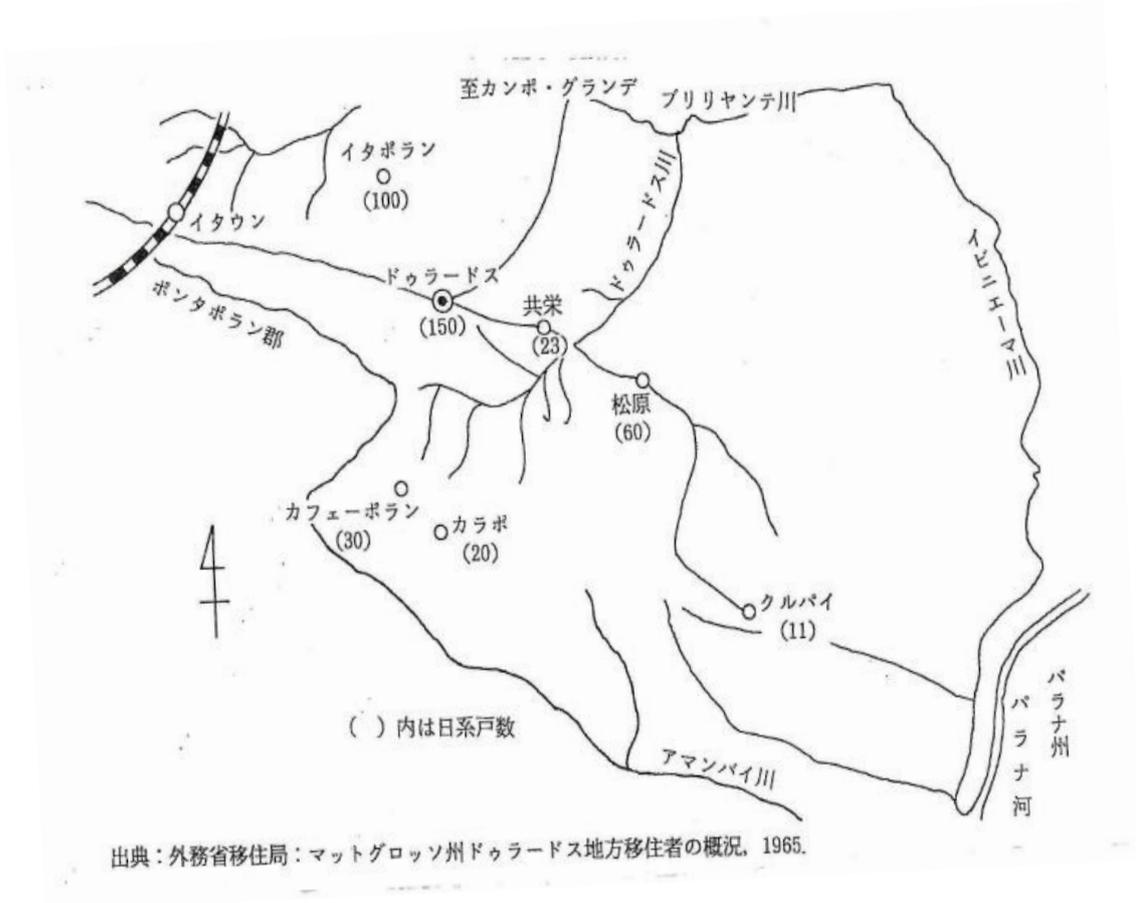
また電燈も植民地に設置され各家庭に電気が灯り、ランプの姿が消えていった。子供達は、ドウラードス、カンポグランデ、サンパウロと上級の学校に学ぶようになった。小店ばかりだったビラブラジルも新しくファチマドスールと改められた。ファチマドスールには、日本人会、日本語学校、女子青年団ができた。商業に従事している方々は、交通不便をものともせず遠方より食料、雑貨、必需品を輸送し、届けてくれた。

このように植民地建設に際し、たくさんの周辺の方々に支えていただき、助けていただいたことを決して忘れてはならない。



(1953年5月15日ルイス号船中にて：朝日新聞より抜粋…柳生氏提供)

[参考資料] ドウラードス周辺移住地 (1960 年前後)



[引用文献]

・外務省移住局：マツグロソ州ドウラードス地方移住者の概況, 1965

[参考文献]

・中村四郎：松原移住地の概況、旧国際協力事業団「移住研究」No.33, 1996

おわりに

今回アンケートに回答して下さった8名の方々に感謝申し上げます。とりわけ那須千種さんにはアンケートの回収から郵送までたいへんお世話になりました。多忙の中、アンケートの用紙に記入はもちろんのこと、他の原稿用紙に克明に記録を書いてくださった方もいて、頭が下がります。

私自身1993年から1995年にかけて幾度か松原移住地を訪ねたことがあります。当時移住地に住んでいた家族はすでに少なかったのですが、移住地の広々とした丘に立つとどこか郷愁を感じたものでした。その理由の大部分を今回の回答・寄稿から得られたような気がします。

たくさんの方のご努力・ご協力にもかかわらず、記録をまとめるのが大変遅くなってしまい申し訳なく思います。お詫び申し上げます。(2018年12月、中村)

追記) さらに刊行が遅れてしまったことに深くお詫びいたします。8名の執筆された方々の中には鬼籍に入られた方もいらっしゃいます。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(2023年10月、中村)

(表紙の写真は、「松原移住地中央に日本人会会館を建設、お祝いの運動会並びに敬老会を開いた時の風景」… 柳生豊彦氏提供)